The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「カメラ・ワーク」誌をめぐる考察(1)
Author(s)	佐藤, 博一
Citation	デザイン理論. 1990, 29, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52638
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第122回　例会発表要旨

「カメラ・ワーク」誌をめぐる考察(1)

佐藤　博一

季刊「カメラ・ワーク」誌は，アルフレッド・スティーグリッツを中心とするアメリカの写真家グループ，フォトセセッションの機関誌として1903年1月に第1号が刊行され，1917年6月発行の第49／50合併号をもって終刊となった。この時期のスティーグリッツの活動は，中心的存在として自らを誇示できる団体の確保とその具体的な場である画廊の運営，そして出版という媒体，これらが軸となって展開されている。「カメラ・ワーク」誌はスティーグリッツの業績と人間像を知るための重要な資料であることはもとより，フォト・グラビアがその大半を占める，良質な印刷技術で一枚づつ丹念に刷り上げられた写真図版と，様々な人から寄稿された数多くの論説によって，写真史上，極めて稀有な雑誌として位置づけられている。

19世紀末から20世紀初頭にかけて，分離派的志向をもつ写真家たちのグループがオーストリア，イギリス，ベルギー，フランスにおいて次々と結成され，写真に関する新しい審美的思潮が徐々に育まれていった。これらのグループの活動には，共同体への憧憬と，アカデミズムの保守性に対する反抗とを共に兼ね備えているという共通点を見いだすことが可能であるが，ヨーロッパの写真運動から強い影響を受けたとされているフォトセセッションの活動は他のグループと異なった様相を示しており，「カメラ・ワーク」誌もまた，機関誌という役割を超え，写真表現に関する審美的価値の転換とアメリカにおける20世紀美術の基盤の形成に深く関与したのである。

1973年にジョナサン・グリーンは全「カメラ・ワーク」誌の寄稿者一覧および図版索引を論説の一部と共に「クリティカル・アンソロジー」と題してまとめ，その冒頭論文の中で「カメラ・ワーク」誌の創刊から終刊に致る間の節目を1907年，1910年，1915年，に設定し，第一期（踏襲期），第二期（拡張期），第三期（探求期），第四期（決算期），として系統化している。これは20世紀初頭の十数年間に写真をめぐる状況がいかにめまぐるしく変化したかを示しており，また，その推移に対して「カメラ・ワーク」誌が敏感に反応してい

たことを表している。

1969年には「カメラ・ワーク」誌の復刻版が作られたが，図版，論説，広告，総てオフセット印刷による単色刷であり，整然としたタイポグラフィーは再現されているものの，それぞれの内容の把握を可能にしたという程度にとどまっている。実物の「カメラ・ワーク」誌の，やや厚手の紙と活版印刷から得られる力強い重厚感や，当時の意欲的な印刷実験であり美的表現の探求とも捉えるこのできる写真図版などから，再現と表現のはざまに横たわる価値体系について，現代に示唆するものを感じとることもできよう。写真とその技術をめぐって，今日に至るまで，様々な展開を呈した写真観の再考には最も適した素材である「カメラ・ワーク」誌の周辺には，実に多様な論考の視点が潜んでいるように思われる。今後，更に問題点を明確にし，研究を進めていきたいと考えている。

（平成2年2月10日　同志社大学）